物が少ないのは、執着しないで済むようになのかなと考えてしまって、慌ててその考えを追い払った。
「…パーチェ…、私の事……、好き？」
「そんなの！聞かれるまでもなくフェルが好きだよ」
部屋の中へと向かう背中にそう問いかけると、間を置かずにそう返事が返ってくる。それがとても嬉しいと思った。
「…お願い、何も言わずに私を抱いて」
「抱いて…って…えぇぇぇぇぇっ～？！？！？！」
後ずさるパーチェに、フェリチータが、その分距離を詰める。
「それとも、私にはそんな魅力…ない？」
「そんな事ある訳がないよ！ありすぎて困ってる位なのに」
「…パーチェ」
潤んだ瞳で見上げるフェリチータに敵う訳もなく、パーチェは長い息を吐いた。
「全く、フェルからそんな事言わせるなんて、レガーロの男として恥ずかしいよな」
「じゃあ」
「…その代わり、途中で止めてあげられないから。その覚悟があるならおいで」
パーチェはベッドに座ると、その隣を軽く叩いた。ここまでおいでと言う事なのだろう、フェリチータの意志で。
その、ベッドまで数歩の距離がとてつもなく遠い。フェリチータはがちがちに固まっている両足を何とか動かして、パーチェの前に立った。
「パー……」
「…ごめん、もう無理」
名前を呼び終える前に、強く抱き竦められた。それと同時に唇を塞がれて、すぐさま熱い舌が絡む。言葉も奪われてしまうような深いキスに、それだけでまるでお酒でも飲んだかのように頭がくらくらとしてくる。
「…フェル」
そっとベッドに押し倒される。
狂おしく口づけながらも、パーチェの指先はフェリチータのネクタイを解き、スーツとブラウスのボ